

やたいの二そで

パン、パン、って軽い音が、公園の反対側から聞こえてきた。

きょうは花火大会だから、公園にいる人はみんな会場に向かって歩いてるなあ。浴衣ゆかた着てるひと多いし、みんな楽しそう。　　だけど。

暑い夏のおひさまがちょっと隠れて、ほんのり赤い公園のすみっこ。そこに、いつも通り車が停まつてる。

甘いにおいをする車にくつついてるのは、きょうだけ仮置き長いテーブル。その下には小さなすがいくつがあつたはず。でも、そこにいるのは女の子がひとりだけ。

「はあ　かおるちゃん、ジュースとドーナツ、追加」
車の屋根につけられた電球が照らしてるのは、丸い頭の短い髪——1ヶ月ぶりの、せつなちゃんの姿。

「おいおい、いつからウチは呑み屋の屋台になったんだい？　それじゃ飲んだくれてるオジサンだよ」

かおるちゃんの言うとおりだわ。赤いTシャツに、ここからは見えないけど多分パンツ姿。元氣そうな格好なのに　　テーブルで頬ほおづえついている顔、なんだか疲れてるみたいだもの。

「気分はそんなものよ。あー、もう！」

ドンっ、ってテーブル叩いた音と一緒に車までゆれて、思わず声出しちゃいそうになっちゃった。すっごいなあ、せつなちゃんのストレスってば。

「あんまり派手にやらないでよ？　花火のお客さん用に、わざわざ作ったテーブルなんだから」

「だったら、花火大会のところでお店出せばいいじゃない　　」

そおつとまた覗のぞいてみたら、ぶつぶつ言いながらテーブルに置かれたコップを口でくわえてる——ほんとにストレスたまってるんだ。こんなせつなちゃん

3 やたいのこそで

ん、初めて見るもん。

1ヶ月前はこうじゃなかったのに

「で、まだ行かなくていいの？ 花火の本番には早いけど、お嬢ちゃんのとこで浴衣着せてもらうんでしょ」

ドーナツの機械いじりながら、かおるちゃんがそう訊いている。いつものことだけど、不思議だなぁ。わたしたち、かおるちゃんには言っていないはずなんだけど。

「先にドーナツ渡してくれって、ウェスターに頼まれちゃったのよ かおるちゃん、ひょっとしてウェスターになにか吹き込んだ？」

「オレが？ できるわけないじゃない。こうして来てくれなきゃ、兄弟の味だってわかんないのに」

「そう よね」

そう言っつて、せつなちゃんが宙を見つめた。そうなの、できるわけないのよね。でも

「まあ、ちょっとぐちって、気が晴れるンならいい

けどね。でもそれ、兄弟ンとこじゃダメなの？」

「それよ、それ。聞いてよ、かおるちゃん！」

うわっ、びっくりした！

いきなり立ち上がったせつなちゃんが、窓の中に顔を突っ込んできたんだもん。

かおるちゃんの『兄弟』——ウェスターさん。ラビリンスの公園にお店出してる、って、まえに聞いたな。かおるちゃんが、これと同じ車をあげたんだって。

「あの、あのおバカはねっ！ ひとに大変な仕事押し付けて、自分はお気楽にドーナツ焼いてるのよ、もっつ！！」

「あー、ドーナツは焼かないで、揚あげるんだ。普通はね」

「どっちでもいいわよ！！」

ドンっていう音がして、また車がゆれた。予想してたから、もう声だしそつにはならないけど。

それにしても。お仕事かぁ ウェスターさんのお使いが、じゃないよね、これ。それじゃやっぱり

「もうちよつと、きじゅ氣遣つてくれてもいいじゃないのよお」

「あら、またテーブルに突っぶしちゃった。ほんとに大変。わたしたちには見せてくれない姿だわ。」

「そういえばさ、塔の周りのゴミって、片付いたんだって?」

「え? ええ、そう どうして知って」

「せつなちゃん目が、まんまるになった。さすが、かおるちゃん。」

「やつぱり、かおるちゃんが何かしたんじゃないでしょうね?」

「疑い深いなあ オレは、ただのドーナツ屋のオジサンだって。げは♡」

「ああ、納得してません、って顔になっちゃった。せつなちゃん、ずいぶん顔にできるようになったなあ。」

「でも、先に来てよかったわ。ラブたちにまでグチりたくないもの」

「ま、ね あとで、ぶん殴られなきゃいいけど」

「苦笑いしながら、わたしたちの方を向いて、ぼそつ、て小さな声。やつぱり だから、なんだ。」

「え? なにか言った?」

「いんや、なーんも。さあさあ、十分グチったんじゃない? もう行ってあげなよ」

「そうね。それじゃ、お代は」

「そんなの、兄弟のドーナツ運び賃でお釣りが出るよ。そんじゃ、嬢ちゃんたちよろしく」

「かおるちゃん?」

「せつなちゃんの背中が見えなくなつて、最初に立ち上がったのはラブちゃんだった。」

「ん? ああ。いいよ、もう」

「わたしとミキちゃんは、まわりのゴミを袋に詰めながら立ち上がった。」

ジュースのコップにお菓子の袋。せつなちゃんが来る前から、ここで待ってたんだもんね。

「で、行かないの？ もたもたしていると、お嬢ちゃんの家についちゃうよ？」

「かおるちゃんがそう言うてにやっつて笑った。けど、かおるちゃん、せつなのこと、知ってるの？」

「ラブちゃん、じつとまっすぐ目を見つめてる。気持ち、よくわかるな。わたしだって心配だもん。」

「ん〜。まあ、カンよ。オレ、天才だから。ぐは〜」
「ラブちゃんの目、まだにらんでる。けど、」

「やっぱりホントなんだ。せつなちゃん、ラビリンスの偉い人になった、って。」

「さっきのやりとりと、かおるちゃんの態度でわかった。これ、ホントにホントなんだ。」

「ウラで糸ひいてるの、かおるちゃんじゃないでしょね？」

「さ〜て、なんのことかなあ？」
天井を見上げてるかおるちゃんを見て、ミキちゃん

んが一步前に出た。腰のポシエットを両手で持って、「証拠は拳あがつてるんですからね。ブルン！」

青い妖精さんが、ミキちゃんのポシエットからびよこん、と飛び出して、メモを渡してまたポシエットに消えていった。

「ほら、アカルンからの連絡よ。せつながラビリンスの代表になつたつて。それも、いきなりよ！」

「ほかにもあるよ。メビウスの塔が修復中だからつて、ウエスターのドーナツ屋の前で偉い人たちが打ち合わせしてるとか。そんなんで、みんなをまとめられるわけ。」

「車の中に詰め寄ってる、ラブちゃんとミキちゃんの前、手が出てきた。」

「選ばれたんなら、それでいいんじゃない？」

「見ててごらん。きつと、ドーナツ屋のせつなちゃん嬢ちゃんの周りまわには、いっぱい人が集まってくるから。みんな黙って、考えてね。」

「いまままでと違つ、わたしたちをまっすぐ見て、ゆっ

くり話してる、かおるちゃんの顔、それを見て

「そんなに、うまくいくかなあ」

思わず口を開いたわたしに、ラブちゃんたちが振りかえった。なんて言えばいいかわからない顔して。

「せつちゃん嬢ちゃんは、ラビリンズで生まれて、ラビリンズで育った子なんだろう？ だったら、信じてやんなよ。あの子と同じ、ラビリンズの人たちをさ」

そう　なのかもしれない。けど、なんだろう。モヤモヤするなあ

「で、それはそれとして、なんだけど　やっぱり、まだ行かないの？」

え？

「いや、えーっと　結構カッカきてたから、精神安定用に、ちよつとだけ梅酒入れたんだよね。なんだか、ちよつと酔ってるっぽかったんだけど」

え〜っつ！

「ブッキー、ミキたん、行くっ！」

荷物つかんで立ち上がったラブちゃんに続いて、わたしも走りはじめた。

「せつちゃん嬢ちゃんによろしくねえ〜」

なにのんびり言ってるのよ、かおるちゃんはっ！！

「あーあ。なーんか、またごまかされたかーんじ」
ぶんぶんむくれながら、ラブちゃんが言った。そのへんの小石でも蹴り飛ばしちゃいそう。

「そうは言っても、糸ひいてる証拠もないし　私だって、ブルンがいなかったら、ラビリンズのこと何も知らなかったもの」

ミキちゃんがそう言っつとりなしてるけど、逆効果じゃないかな。なんでピルンに連絡しなかったのか、つて思ってるの、ラブちゃんの顔に出ちゃってるもん　あつ。

「ごめんね。わたし、ちよつと戻る。ハンカチ落と

7 やたいのこそで

しちやたみたい」

「ラブの家で待つてるわよ、ブッキー」

ミキちゃんの声を背中に聞きながら、わたしはおるちゃんの車に向かって走っていった。

(そうは言っても、糸ひいてる証拠もないし)

階段を登ってたら、ミキちゃんの言葉がもいちど頭に響いた。

そう、そつなのよね。証拠なんて、なんにもないんだもん。かおるちゃんはいつも不思議で、不思議が当たり前だから、それでみんな納得しちやてるけど。でも、これはなんか違うっぽくて あら？

「おー、もういいよ。嬢ちゃんたちは帰ったから」

かおるちゃんの声だ。けど、変ね。わたしたちが帰ったって、誰に話してるの？

『ああ。やっぱり、兄弟にならグチを言ってくれる

んだな』

声はするけど、車のまわりに人の影がないし、車の中かな？ なんだか、そーっと歩いちゃうな。悪いことしてるわけじゃないのに。

「そう言いなさんな。今のうちだけだよ」

車の反対側に回ったら、かおるちゃんがドアに向かってしゃべってるのが見えた。ドーナツのお皿持ってた あれ？

「まあ、オレのドーナツでも食べて、がんばんな。ウエスター兄弟」

そう言ってお皿をドアの うっん、ドアの脇にある扉の中に押し込んでる!!

『 やっぱり、まだかなわらないな。カオルチャン兄弟の味には』

え？ ウェス あー！

「あゝっ！ むぐっ」

わたし、思わず開いた口に思いつき手を当てて、車の前にしゃがみこんだ。だって、だって

「見つけたっ、証拠っつ!!」

口に当てた手でも、小さい声がこぼれるのだけは押さえきれなかった。

「ほいじゃ兄弟、花火帰りのお客さん来る前に仕入れしてくるから、ちょっと待ってて」

車の中をもう一度確かめようと中腰になったとき、そんな声が聞こえてきた。

そーつと覗いたら、かおるちゃんが車を降りてきている。わたし、頭を引つ込めて、耳をそばだててみたわ。

なんだかウサギになったみたい。わたしクセっ毛だから、アンゴラかなあ。うっん、ヘンなこと考えてる場合じゃないわ。かおるちゃんの足音、もともとちっちゃいけど、それが消えるまでじつと聞いて。うん、行っちゃった。それじゃ、

コン、コン

開けっぱなしの車のドア。わたしはそこに頭だけ入れながら、ドアを軽く叩いてみた。

『ああ、戻ったか兄弟。悪かったなあ。粉が足りないなら、無理して分けてくれなくても』

「ウエスターさん!?!」

ドアの脇に、ホールキーが入るくらいのちっちゃな扉。そこから声が聞こえてきた瞬間、わたしは大声出してたわ。

『えー! 兄弟じゃないの!?!』

「わたしは山吹祈里ですっ!」

あれ? なんだか考え込んでる感じの声?

ああ、そっか。名前じゃわからないんだわ。ラプリンスに帰るときも、ラブちゃんのこと『ピーチ』って呼んでたっけ。

「——キュアパイン、で、わかりますか?」

プリキュアの名前を出したとたん、扉の向こうで

手を叩く音が聞こえてきた。面倒だなあ　　って、そんなことしてられないんだった!

「ウエスターさん、これってどういうこと!? ラビリスにいるウエスターさんと、日本のかおるちゃんの話してるの、なんでせつなちゃんには黙ってるの!!!」

一気に叫んで、わたしはちよつと咳き込んだ。でも、なんだか許せないの。だって、

『あー、えつとなあ　　パインくん、か。どうやって話してるのかは、俺にもよく分からな　　』

「かおるちゃんが不思議なのはいつものことだから、どうでもいいの!　せつなちゃん、いきなり偉い人になつちやっただんでしょ?　なんで手伝ってあげないのよつつ!!!」

だってウエスターさん、のんびりした声で話してるんだもん。さっきかおるちゃんと話してる時も、わたしが叫んでる今も!

そんなことしてる時じゃないでしょ!?　さっきのせ

つなちゃん、すつごく疲れた顔して

『イスの手伝いなら、一応やってるよ。ちゃんと見守ってる』

え?

次の一声のために大きく息吸ったところで、わたし、動きが止まっちゃった。

「見守る?」

吸った息をゆっくり戻しながら、出てきた言葉はそれだけ。でも、

『そう。兄弟が、パインくんたちを見守ってきたようにな　　』

わたしたちを　　かおるちゃんか!?

「それって、どういう　　?」

『ここどころ、兄弟は苦労してたぞ。君たちが変なことに巻き込まれないように、いろんなところと交渉してな。昨日はCIAで、今日は　　どこかの大統領だったかな?』

な、なんだか話が大きくなってるんだけど　　ひ

よっとして、ごまかしてる？

「とりあえず、かおるちゃんのことはいいです。それとせつなちゃんと、どういう関係があるの!？」

気にはなるけど、今はわたしより、せつなちゃん
が先よ。うんー!

『あー いやその、だな。つまり、俺が言うのも
なんだが』

ああ、もう、なんだかイライラするなあ!

「はつきり言いなさい! 男の子でしょ!!」

悪い人だったけど、これなら戦ってたときのウエ
スターさんの方がましだわ、もう!!

『はは、イースと同じこと言うなあ。さすが、友達だ。
つまり、な。強すぎたんだよ。君たちも、イースも』

え？

『強くなることしか考えてなかった俺が言うのも、変
な話なんだけだな。いや、まさか神様にされちゃう
なんて、びつくりだよ』

か

「神様って」

『みんな、メビウスさまとその機械に頼って生きて
たんだ。解放されても、すぐに一人で生きていける
わけじゃないさ。だから、とりあえず俺たちの誰か
がトップに立たなきゃ、

ってな。実はこれ、兄弟の受け売りなんだが』
なんだか、頭がくらくらしてきちゃった。そんな
人たちまとめるために、中学生を国のトップに、な
んて

「じゃあやつぱり、せつなちゃんを偉い人にした張
本人って、かおるちゃんなのね」

なんとなく、そんな気はしたの。いつ頃からかおる
ちゃんでも、あんなに思わせぶりなことって、めつ
たにしないもん。けど、けど

『言い出したのは兄弟だ。まあ兄弟に言わせると、俺
もサウラーも賛成したから『共犯』だそうだけだな』
かおるちゃん、なにやってるのよもおおっ!

パンツ!!

『うわっ!!』

おっきな音とウエスターさんのびっくりり声で顔をあげたら、原因はわたしだった。左手が、勝手に車のドア叩いてたんだわ。

だめだ、ちよつと落ち着かなくちゃ。おおきくひとつ深呼吸して うん。

かおるちゃんが言つのなら、ホントなんだろうな。かおるちゃんのこと、わたしたちむかしから見ただけど、不思議なこととしても、いつも最後はつましくいくんだもん。

でも、なにかひつかかるの。なにが あ!

「だれかいいなら、ウエスターさんが偉くなればいいじゃない! せつなちゃんを、あんなに疲れた顔になるまで働かせて、あなたは見てるだけってどういうこと!?!」

そつよ。体力も気力もあるウエスターさんなら、少

しくらい疲れたって

『だから言っただろ? 俺は見てるんじゃない、見守ってるんだよ。兄弟と同じで』

はい?

一瞬、わたしは口が閉まらなくなったわ。な、なに不思議そつな声で言ってるの、この人は??

『しっかり見守れるように、兄弟が君たちをどうやって見守ってきたか、色々聞いたんだぞ。小さい怪我がいさかいは口を出さず、大ごとになりそうなきだけ、わからないように手を出して、いつも何もなかったように、だったかな?』

俺も早く、完璧にできるようにならないと

「だからさあ、それ見守る相手に言っちゃダメでしょ、兄弟」

あ!

背中からの声で振り返ったらわたしの前に、両手に袋抱えたかおるちゃんが立ってた

「かおるちゃ あわわっ！」

詰め寄ったわたしのお腹の前に、かおるちゃんのおつきな手が出てきて、

「ま、座ってよ」

ちよつと持ち上がったと思ったら、いつの間にかわたし、車の中の長いすに腰掛けてた。

「ん〜とお、あ、そうそう。いちご牛乳買ってきたんだよね。どう、一杯？」

のんびりした声。いつもの通りのかおるちゃん。でも、そのかおるちゃんが！

「かおるちゃん!! わたしたちみんな、かおるちゃんのこと信じてたのよ!!」なのに、なのに なにやってるのよ、バカあつ!!!」

うまく言えないよ。わたしたち うつつん、わたし、ずっと昔からかおるちゃんのこと信じてたのに。ただのよく行くドーナツ屋さん、ってだけじゃな

いわ。ちつちやなことでも聞いてくれて、わたしたちのこと考えてくれて、わたしたちの友達のことも考えてくれてるって。なのに! え?

目の前に、かおるちゃんの手。開いた手の上に、なにか乗っかっている。

「もつちよつと後で渡すつもりだったんだけどねえはい、これ」

思わず開いたわたしの手の上に、かおるちゃんの手からきらきらしたなにかが落っこちてきた。

バッジ? そらいるの地に地球みたいなのが描かれている。この絵、どこかで見たような気がするな。あ、下に文字がある

「UNIE あん、じゃなくて、ゆないてっど、ねいしょ 国連!」

「そ。これでお嬢ちゃんたちは、国連の特別大使ってこと。げは」

ちよつと え? な、なに、それ??

手のひらのバッジとかおるちゃんの顔の間を、目が

勝手に行ったり来たりしちゃう。だって、こんなえ!?

「だってさ、考えてももらんよ。あんだだけ世界中壊しちゃう相手と戦った、伝説の戦士だよ? このくらいは当然じゃない?」

そ、そっか。そう言われると、当然 かもしれなけれど、

「困るう」

わたしの口からは、それしか出てこない。だって、

「はははっ、冗談冗談。お嬢ちゃんたちが特別大使あつかいなのは本ただけど、ほとんどの人は知らないことなんだよね。」

そのバッジだってそう。なんなら捨てちゃってもいいよ、バッジが国連からぶつ減った、ってことに意味があるだけだから」

バッジが国連で、わたしたちが大使で、でも冗談で もう、なにがどうなってるのか、ぜんぜんわ

かんないっ!

「まあまあ、とりあえずこれでも飲んで」

そう言われて手を見たら、いつの間にかわたし、コップ持ってるわ。コップの中には、ほんのりピンク色の白いもの。言われるままにくちつけてみたら、甘くて優しい味が広がった。さっき言ってた、いちご牛乳、かな?

目をつむって、ふう、ってひとつついた息もちょっと甘くて、なんだか少しほっとするな

「落ち着いた? んじゃ、説明しよっか。」

簡単に言うとき、『伝説の戦士プリキユア』は、伝説の中に帰ったんだよね」

え? わたしたちが、伝説に帰った!?

「ちよ、ちよっと待って。でもわたし、わたしたちここに

つむってた目を開いたら、すぐ近くのかおるちゃん、口元がにや、って笑ってた。

「お嬢ちゃんたちがラビリンズから帰ってきてても、誰

からもプリキュアのこと聞かれないでしょ？」

そう言えば

ちよつと変だな、って思ってたの。プリキュアになって、ラビリンズを取り戻して　日本に戻ってきてても、みんな普通なんだもん。ラブちゃんにも、わたしにも、モデルのミキちゃんにさえ！

あんなにすごいことがあって、その原因がここにいて、どんなに隠したって、隠しきれることじゃないはずなのに

「電線ドカドカ、って世界中にやつちやっただからねえ。あれを解決した人たちがここにいて、ってわかったら大騒ぎになっちゃうでしょ。このままにしとくと、いろんなトコがちよつかいかけてきて、『困るう』じゃ済まなくなっちゃうよ」

「　それで、これ？」

コップを脇に置いて、青いバッジを目の前に上げてみた。そらいろの、きれいなバッジ。

「それで、それ」

うなずいたかおるちゃんをじつと見てたら、

「CIAとかも、本当なんだ　」

思わず声がこぼれちゃった。

「そ。CIAとか、どっかの大統領とか、ちよと裏つかわの人とか。一部の人たちは知ってるけど、そこは、まあ、ね」

サングラスの向こうの目が、チラッと車のドアの方にむいた。ドアの脇にはちよつちやなとびら。ラビリンズのウエスターさんと話せちゃう、普通はあるわけないとびら

「あははつ　まあ、いいじゃない。大事なのは、お嬢ちゃんたちに悪さしようって人はもういないってこと。しようしたら、世界中のこわいオジサンたちが黙ってないからね。げは　」

思い出した。いままでもそうだったわ。

そう。いままでもあったのよ。すつこく困ってることが、なんだかよくわからないうちに解決しちゃうこと。

わたしたち 特にラブちゃんが走り回って頑張つて、でもそれだけじゃできるはずないことができちゃうこと。

それは、きつと全部

「これが、見守る、ってこと？」

「これも、見守るってこと。さっすがに今回はちよつと骨が折れたねえ。まあ、まだ手足は動くけどさ。げは♡」

小さな椅子に腰かけたかおるちゃんが、わたしの目の前で手足をぶらぶらさせてる。

それを見てたら、なんとなくわかつちゃった。だって、「ラピンスの人たちにも、それをやるうとしてるんだ せつなちゃんを、守るために」

だってよく見たら、かおるちゃんの顔が少し疲れてる。さつき見た、せつなちゃんと同じなんだもん。『俺は力しかないバカだし、どれだけ出来るかわからない。でも、パインくんたちを見守ってるのが兄弟なら、イースは俺がちゃんと見守らなくちゃな』

ちっちゃなとびらの向こうから聞こえてきた、いままでずっと黙ってたウエスターさんの声。そっか、さっきのんびりしてると思ってたのは、疲れてるからだったんだ 体力いっぱいなのに、ひよつとしたら、せつなちゃんよりも。

「なーんてね。あはは、信じちゃった？ これ、ぜーんぶウソかもしれないよ？ なにせオジサンはホラ吹きだからねえ。げは」

だから、わたしは思い出しちゃった。

「ううん、信じる」

もう、5、6年前のこと。最初にかおるちゃんとの公園で会ったときも、こう言ったの。

「信じるよ。だって、わたしはいのりだもん」

あ。かおるちゃん、頭かかえちゃった。あのとくとおんなじだわ。

公園の隅で倒れてた、かおるちゃんに声かけられたとき。ミキちゃんは気持ち悪いって言って、ラブ

ちゃんは救急車呼ぼうとして　でも、あの頃はサングラスしてなかったかおるちゃんの目、子犬みたいだったから。

「うん　まいった。変わんないなあ　さすがだよ、ブキ嬢ちゃん」

「ふふ。久しぶりに、呼んでくれたな。『いのりはすっごく強い武器だから』って言ってた、このあだ名。」

「ちよつとは、成長してます。ふふっ」

言った瞬間、自分でびっくりしちゃった。だってわたし、いま笑ってたんだもん。ついさっきまで、あんなに怒ってたのに　あ、そうだ。

「それじゃこのバッジ、ラブちゃんたちにも」

「ああ、それはちよつと待ってくれる？」

「あら。車を出ようとしたら、お腹にかおるちゃんの腕が回ってきて、わたし、ちよつと宙に浮いちゃった。なに？」

『イスには言わないで欲しいんだ。ラビリンズはまだ途中だから。頼むよ、パインくん』

腕から降りたわたしに、ウエスターさんの声が聞こえてきた。そっか。ラブちゃんが聞いたら、絶対せつなちゃんに言っちゃうもんね。でも　うん、それじゃ、

「だったら、パインって呼ばないで。そしたらわたしも一緒に見守ってあげます」

「『え!?!』」

「あははっ。かおるちゃんとウエスターさん、ふたりの声が重なっちゃった。」

「おいおい、お嬢ちゃんまで見守る側に回っちゃったら、オジサンどうすりゃいいのよ」

「あ、かおるちゃんってば。」

「ただの『お嬢ちゃん』も禁止！　かおるちゃんは今までどおり、わたしとみんなを見守ってくれるんでしょ。わたしは獣医さんの勉強しながら見守るの。ね？」

「わかった。ブキくん で、いいのかな？」

はい、つてウエスターさんに応えてから、わたしはまつすぐ、かおるちゃんを見つめた。きつと

「はあ。 あーあ。 表舞台に立てる夢があるつてのに、わざわざ舞台の いや、屋台の袖そでに引っ込んでじゃうんだもんなあ。 失敗したよ、ブキ嬢ちゃんにめっかつたのはさ。げは」

ほら、やっぱり。 サングラスの下にはむかしとおんなじ、子犬の目があるんだもんね♡

「るちゃーあぁー！」

あれ？

外からなにか聞こえてきた気がして、窓のほうを見ようとしたら、

「あー、もう来たか。 早かったねえ」

つて言いながら、かおるちゃんが機械の下の方

らなにか取り出した。

絆創膏？

「あ、ちよつとそのクツション、おもての椅子の上うへに置いてくれる？」

言われてわたしはクツション取つて、車の外に出て行った。 外の椅子 さつきせつなちゃんが、ぐたつとした椅子の上うへにそれを乗せて、振り向いた向こうから、

「かーおーるーちゃーあーん！」

つて大きな声。

「お、来た来た。 ブキ嬢ちゃんは隠れてて」

なに？ あ、せつなちゃんだ。 赤い浴衣はかわいいのに、なんだかすごい勢いで、こつちに向かつて駆けてきて

「よ、く、も、バラしたわねえーっつ！？」

階段を二段飛ばしで登つてきたかと思つたら、かおるちゃんのお腹はらにめり込んだ。 ちゃった。

「もうー！ あの子こに心配しんぱいかけたくなかつたからこ

でグチってたのに　っ!」

そのままばしばし殴ってるけど、かおるちゃんて
ばせんぜんこたえてないみたい。

「あはは、やっぱりだ。鼻緒はなおで甲すが擦れちゃってる
じゃないか。ほれ、足出して」

「なにが、足出して」よ!　って　え? わ、わわ
わっ!」

転んじやう!　って思ったんだけど、そこにはわた
しがクツシヨン置いといた椅子があつて、両足上げ
た状態で、すとん、って座っちゃった。

「だから、そういつ、ことじゃ、なくっ、てっっ!」

ああ、足に絆創膏はってるかおるちゃんの背中を、
そのままばかばか殴ってるなあ、せつなちゃん。

　と、わたしも、見守るんだつたっけ。

「せつな大統領さん、こんばんは」

「え!?　って、ブッキー、あなたまで!」

車の陰から出てきたわたしの方を、びしって指さし
てる、せつなちゃんのびっくり顔がかわいい♡きつ

とかおるちゃん、わたしたちのこんな顔を見守って
たんだろうなあ　　と、いけないいけない。

「せつなちゃん。ちよつとは、わたしたちにも心配
させてよ。いいでしょ、ね?」

できるだけにっこり笑ってそう言ったら、せつな
ちゃんが大きく両手を上げて、

「えいっ!」

かおるちゃんの背中を手のひらで思い切り叩いち
やった。

「今回は、これで許してあげるわ。もう、騙だましたり
しないでよ!」

絆創膏はり終わつたかおるちゃんが、背中さすり
ながら、だまつて車の中に戻つてく。

それを見てたら、思わず言葉がこぼれちゃった。

「かおるちゃんは騙だましたりしないよ?　わたし信じ
る。信じてるから♡」

あ、車の陰にかくれちゃった。ふふっ。

「ある意味、ラブよりタチわるいわよね、ブッキー

つて
」

「なーに、せつなちゃん？」

ちよつと首をかしげたら、せつなちゃんがいきなりため息ついちゃった。

「いいえ。それじゃ、ラブたちのところに戻りましょ。

ブッキーも早く浴衣に着替えないと」

「でも、よくわかったなあ。かおるちゃん」

せつなちゃんが慣れない草履でびよこびよこ歩くと、あとなついて行きながら、わたしは思わず口にした。てた。

ほんとに、なんでわかるんだろう。せつなちゃんが怒って来るとも、草履の鼻緒で怪我しちゃうことも あれ？

（失敗したよ、ブッキーにめづかったのはさ。げは
）

さっきのかおるちゃんの言葉が、なぜだか頭に浮かんで来た。ひよつとしてあれって、わたしが見つけたんじゃないか？

「ブッキー？」

せつなちゃんが振り返って、わたしを呼んでる。

そうよね。

「ちよつと待って〜」

スカートのポケットにしまった、そらいろのバツジを手で確認してから、わたしはせつなちゃんのそばまで走っていった。

—おしまい—